研究会だより

## 第12回ヨーロッパ先天異常学会に出席して

1984年9月5日から7日までNetherlandのVeldhovenにおいてEuropean Teratology Societyの12th Conferenceが開催され，帯欧中の私は出席の機会を得た。Amsterdamから東南へ電車で40分，工業都市Eindhovenに着く，その郊外バスで30分のところにVeldhovenがある。会場で国立衛生試験所の大森先生，岡山大の猪先生，長崎大の松尾先生，角谷研究所の角谷先生とおちあった。Eindhovenの会場はKoningshofとよばれる国際会議場でホテルも兼ねている。もっとも万事質素なこの国柄のこと，森の中に2階建て，一見夏季学校と見違えるほどの簡素な建物で，一同ここで本当に国際学会が開かれるのかしらんと心細い限りであった。ひとり国際会議慣れしておられる大森先生が日本代表格といったところで旧知の研究者に気軽に挨拶されたりして心強く感じたものである。学会組織は受付嬢わずか2人，本部はどこにあるのやら，ようやく指定の部屋に落ちついて旅装を解いた。ホールで旧知のPetters博士の長身を見出したとき，なさけなくも感傷的になってかけよったものだ。Peters博士はNational Institute of Public Health and Environmental HygieneのTeratologyの部長で今回の組織委員でもある。まず飲もうということで一緒に地下におりた。驚ろいたことに地上の建物の簡素さに比べてビッフェはかなり豪華で夜に入ると楽団の一行がやってきてリクエストに応じて弾いてくれた。この頃からまわりは国際色豊かになり，3日前，イギリスのHuntingdonで会った美人研究者と腕をくんで記念写真を撮るまでになっていた。

第1日目（9月5日）は大会直前急逝されたGropp会長に代ったSullivan博士の挨拶から始まった。学会は4 Sympodiumと62 poster sessionから成り，このたびの正会員101名（登録済のみ）当日会員を入れて200名程度，同伴者は20名（登録済のみ）を数え，うち日本からは正会員5名，同伴者5名であった。これだけこじんまりとした学会だとだれそれはどの部屋にいる，いや，さぼっているなどとすべて筒抜けである。私たち日本人一行は大森代表だけを置去りにしてBrabantの古都Antwerpを遊覧した。これは主催者が専用バスをしつらえてくれたもので恣意にさぼったものではない。

第2日目（9月6日）は午前中Sympodium Ⅱの「Developmental Disorders of the Nervous System」でchairpersonはGeelen博士であった。Geelen博士は齧歯類をつかって神経管形成への催奇形剤の影響を長く研究してこられたので，各演者の内容に期待したが，ヒトの神経組織の疾患，behaviorに及ぼす影響が主であった。午後からは大森先生が大活躍で「Guidelines in Reproduction Texicology」のWorkshopに参加され，松尾先生は「Bis-Diamine-induced Defects of the Apparatus in Rats」のfree communicationに参加された。私は「Effects of Cephalantin upon Cleft Palate and other Anomalies by Vitamin A」の論稿についてPeters博士とGeelen博士に批判を乞うた。二人とも内容に立入って実のある議論となったが語学力不足の私の方が疲れて寝こんでしまった。そのためその夜のConference Dinnerに出た大鰻の蒲焼(?)を食べ損ねてしまった。もっともあまり大味でおいしくなかったそうである。

第3日目（9月7日）は午前中Sympodium Ⅲで「Developmental Biology and Teratology」であった。内容は各演者の概念的な話で難解であった。むしろposter sessionにおいてwhole-embryo-culture methodsが多かった。器官形成期全胚培養の発生生物学・実験奇形学への応用は両棲類胚，鶏胚における誘導実験の成果をふまえた齧歯類胚の培養技術の確立によっていちじるしく増幅されている。角谷先生は「A Chromosome Study of the Patients with heavy mental Retardation」を展示されていた。午後のSympodium Ⅵは「International Guidelines and Regulation for Reproductive Texicity Testing」で大森先生が再び登壇されて「Are Japanese Requirements really Different ?」を講演された。大森先生の講演を最後に私たちは森の中の会議場を離れた。（永井理事）